

数値の先に、
人々のウェルビーイングを見つめる

新国富指標で測る 持続可能な社会の豊かさ

今を生きる私たち、そして将来の世代も豊かに暮らし続けられるように「持続可能な開発」が世界の共通認識ともたれるようになったのは、1987年頃のこと。その背景には地球の未来のために資源を残そうとの思いがあり、資源問題の解決がより重視されていたように感じます。その後、2000年に採択されたミレニアム開発目標(MDGs)では途上国の開発問題が中心になるなど、時代に応じて重点的に取り組む問題は変化してきました。しかし、新たな問題に取り組むようになったといっても、これまでの資源や環境、健康、教育、貧困や格差問題などが十分に解決されてきた訳ではありません。本当に私たちが目指すべき豊かな社会とは何かを考えたときに、解決すべき問題は多様であり、SDGsではそれらの問題に包括的に取り組もうとしています。

SDGsで目指す持続可能な社会を実現するための目標設定、そして、SDGs達成に向けた成果測定として有効性が期待されているのが「新国富指標」です。新国富指標の特徴は大きく2つ挙げられます。1つ目は、「人工資本」、「人的資本」、「自然資本」の3つの観点から社会のさまざまな要素を金銭的な価値に換算して包括的に経済の豊かさを測ることを目的としていること。2つ目は将来世代の経済・社会活動の基盤となる富(資本)を十分にストックできているかを示すことができ、持続可能性を測定できることです。これらの特徴から、新国富指標はインクルーシブ・グロース(包摂的な成長)を目指すSDGsの取り組みの効果を測る有効な手段になると考えています。

国や企業、大学への導入で 新たな価値を創出する

SDGs達成に向けた活動の

社会的価値を見える化する新国富指標は、イギリスでは世界に先駆けて導入され、中国やインドでは国連から委託を受けて取り入れるなど、各国で活用が進んでいます。日本では福岡県久山町や直方市などの地域でも行動戦略の数値目標として活用を開始。また、私は大学の活動において異分野の連携や融合を促進するうえで新国富指標の導入は有効であると考えています。例えば、医学部では病気を治して健康寿命を延ばすことで人や社会に貢献、教育学部では人を育てることで貢献します。今まで同じ土俵で語られることのなかった学びを、学問領域を越えて「人や社会への貢献」という同じ基準のもとで議論できる。九州大学ではすでに導入されており、異分野の学びの融合が進めやすくなったと実感しています。



馬奈木 俊介
九州大学都市研究センター長・主幹教授

サウスカロライナ州立大学講師、横浜国立大学准教授等を経て、九州大学大学院工学研究院教授、九州大学都市研究センター長・主幹教授。2020年より九州大学総長補佐。国連「新国富報告書2018」代表。

SDGs X Inclusive Wealth

見えない価値を示し、人々の幸福に貢献
SDGsの有効性を測る
「新国富指標」

国連「新国富報告書2018」代表
九州大学都市研究センター長・主幹教授

馬奈木 俊介

現在のみにとどまらず、未来世代の豊かさまでを見据えて策定されたSDGs。そのSDGs達成に向けた取り組みの有効性を測り得る指標として期待されているのが新国富指標である。新国富指標とは道路や機械などの「人工資本」、健康・教育といった「人的資本」、森林や鉱物資源を含む「自然資本」の3つの観点から社会の豊かさを包括的に測る、新たな指標。国連の「新国富報告書」作成の代表を務め、自治体や企業、大学等に新国富指標の活用を提唱する九州大学の馬奈木教授に話を聞いた。



私はこの指標について、今まで数値化できていなかったものについて、今後は評価基準を作っていきたいと考えています。今まで数値化を推進しなかった分野は、数値化により過小評価されることを恐れる一面もあると思いますが、低い評価が出たのであれば、私は改善策とともに構想する存在でありたいと考えます。強みをさらに伸ばす新たな可能性を模索する一助として新国富指標が使われることを願っています。

社会の持続可能性を高めていくことは個人の豊かさ、ウェルビーイングに繋がります。目に見えない価値や経済・社会の持続可能性を測る新国富指標のさらなる浸透と、その先の豊かな社会の実現を目指し続けます。